
ジョジョの奇妙な冒険～逆襲する暗殺者達～

神出鬼没のD I O様

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ジョジョの奇妙な冒険〜逆襲する暗殺者達〜

【Nコード】

N1731V

【作者名】

神出鬼没のDIO様

【あらすじ】

キャラ崩壊なんてもう当たり前です、キャラ崩壊がダメな方やド素人の作品が苦手な方は『戻る』をお願いします

常に命懸けの危険な汚れ仕事を押し付けられ、そして正当な報酬さえ受け取る事もできずその『誇り』を『侮辱』され続けた男達が居た、彼等は己の境遇に納得こそ出来なかったがいつか報われる日を信じ耐え続けた、だがその彼等の我慢はこの裏の世界で血縁以上の絆で結ばれた仲間を始末された事で遂に限界を迎えた、彼らは『誇り』を取り戻す為戦う

可能性の世界

炎上する大通りの真ん中にホルマジオは立っていた。

血塗れの顔と身体は炎に焼け爛れ、思わず眼を背けたくなるほど痛々しい姿になっている。1メートルほどの距離を開けて、彼はまだ幼さが若干残る少年と対峙していた。

「来い……………ナランチャ……………」

ホルマジオは少年に向けてそう言い放ち、そして数秒の沈黙が走り。

「『リトル・ファイイート』!!」

「うおりゃあああああっ!!」

——早撃ちの軍配は、少年に上がった。

「しょおがねーなああああ~~~~ たかが『買い物』来んのもよオ
オーー 楽じゃあ……………なかつただろ? え? ナランチャ……………」

ホルマジオは二、三步よろよろと後じさるとなんとか言葉を吐き出し、

「これからはもつと……………しんどくなるぜ……………
・てめーらは……………」

最期にニヤリと笑いながら、豪快な音を立てて倒れた。

場所は変わりポンペイの遺跡、あちこちが破損し壊落している石造りの建造物、そこにイルーゾオはいた。彼は敵のスタンドに首根っこを掴まれ、石壁にその身体を押し付けられている。

「うわああああああああ!!」

恐怖一色に染められた断末魔を上げて、イルーゾォはフーゴのスタンド『パープルヘイズ』の殺人ウイルスを直に受け見るも無残に「溶けて」死んだ。

再び場所は変わりヴェネツィア行きの列車、プロシュートはその列車の車輪の隙間に引っかかるようにして横たわっている。

全身からはおびただしい量の血が流れ、その片足は有り得ない方向にひしゃげていた。

そしてプロシュートのスタンドは全身が止まることなく崩れ続けている。誰がどう見ようが瀕死だった。

「栄光は………」

プロシュートはうわ言のように言葉を紡ぐ。

「………おまえに………ある………ぞ………」

彼は正に死のその間際まで、スタンド能力を使い続けた。そして1人戦っているであろう弟分であるペッシに向け「オレはお前を見守っている」と、彼はそう言った。

瀕死のプロシュートには、スタンドの発現は相当身体に負担をかけていた。しかしペッシの為に、

そしてチームの栄光の為に、彼は決してスタンドを解除しなかった。

だが、ペッシは――

「このままで………」

口から大量に血を吐きながら、彼は己を重症に追い込んだ男を睨む。

「済ませるわけにはいかねえ……」

ペッシの手には、拳よりも少し大きな程度の亀が掴まれていた。ペッシはせめてもの意趣返しをするつもりだった。男がペッシを見据え、

「堕ちたな……ただのゲス野郎の心に……」
「……！」

そう言うと同時に、ペッシは亀を振りかぶり――

「何をやったってしくじるもんなのさ　ゲス野郎はな」

そしてブチャラティの裏をかいた筈のペッシにほんの一瞬のスピードの差でブチャラティのスタンド、『スティッキーフインガー』の鉄拳が打ち込まれた、ブチャラティの無数の拳撃を受けてペッシの身体はバラバラに分解されて吹っ飛んだ。そしてプロシユートは偉大に、ペッシは惨めに。

二人は殆ど同時に、だがその『誇り』に天と地ほどの差を空けて死んだ。

次は駅のホーム、

「聞こえてるぜギアッチョ！」

。

彼、メローネは仲間であるギアッチョと電話で話していた、勿論ギアッチョも後に命を落とす事となる、しかし彼に先んじて命を落とす運命にあるのはメローネのようだった。

ギアッチョと会話をしている彼に、ボトリと焼け焦げた蛇が落ちる。

スタンドの性質上、彼は常に安全な場所にいる。追われる身である「奴ら」が自分の位置を把握することなど不可能、ましてや攻撃を受けることなど有り得ない——そう油断していた彼の肩の上に、いきなり敵意を剥き出しにした蛇が落ちてきたのである。

彼が無様に取り乱すのも道理と言えば道理であつたのだ。

「あの『新入りの能力』ッ！おれのベイビー・フェイスの残骸をひいひいひいひいひいひいッ——！」

彼は絶叫し、そしてその大きく開いた口から覗いた舌に焼ける毒蛇は喰らいついた。そして彼、メローネもまたここに倒れた。

最初に始末された『ソルベ』と『ジェラート』、残った七人の内これで更に五人が死に残りはリーダーのリゾットとギアッチョの二人だけとなってしまった。

だが彼らは諦めない、先に倒れた仲間の『誇り』に賭けて諦める訳にはいかなかった

そして運河、氷のスーツを身に纏ったギアッチョはミスタと対峙していた、

「ここまで……オレを追い込んだのはミスタ……敬意を表して……やる……だが……今度……覚悟を決めてギリギリのところで 吹き出す『血』を利用するのは……オレの方だ……ミスタ」

そう言った瀕死のギアッチョの後頭部は、吹き出した血が既にガツチリと凍って完璧なストッパーになっていた。その直後、未だ宙を

舞っていた最後の弾丸がついに完璧な角度で跳ね返り――

「頭にツ！勝ったアー……ッ！！」

ミスタの額に突き刺さった。

「！！ う！？ 傷が……！？」

しかしその瞬間、額の弾痕は完全に消え去り

「な……！！」

いつのまにか、ミスタを抱えてその後ろに金髪の少年が立っていた。

「ミスタ…… あなたの『覚悟』は……この登りゆく朝日より
も明るい輝きで『道』を照らしている」

「なんだってエエエエエエエ！！？」

グシャグシャグシャドグシャアッ！！！！

「うぐええッ！！」

ジオルノのスタンド、『ゴールドエクスペリエンス』のラッシュが
身動きの取れないギアツチヨに叩き込まれ、

ズン！！と鉄柱がギアツチヨの喉を突き破り。彼は万感の無念と己
を打ち破った彼らの『覚悟』へのひとかけらの賞賛と共に、事切れ
た。

そして最後、サルディニア島、
リゾットは血まみれで倒れている。傍目から見ても、致命傷、絶望
的だった。

そんな彼の傍らに腰を落とし、一人の男が彼を見下ろしている。

リゾットはもはや焦点の定まらない眼で男を見返していた。

「ついに・・・オレ・・・は・・・つか・・・んだ・・・」
あんたの正体を・・・オレは・・・」

正体。彼らがこの言葉を使う時、それはボスのことを意味する。

リゾットは今、「あんたの正体」と言った。つまり彼を見下ろすこの男こそが、他でもないボス自身・・・！男・・・いや、もはやボスと言うべきか。

ボスは異常なまでに苦しい呼吸を続けていることから察するとリゾットとの戦いでボスもまた相当なダメージを負ったと考えてはいはずだ。

「最期に顔を・・・見せてくれ・・・逆光でよく・・・見えない　顔を・・・」

片膝について荒い呼吸を繰り返すボスにリゾットがそう懇願するが、

「それ以上・・・ここでその会話をすることは許さない・・・リゾット・ネエロ」

彼はそれを冷たく跳ね除けた。片手に持っていたリゾットの足首を投げ捨てて、ボスは苦しい呼吸を続ける。

「おまえは自分がここまでやったことを　暗殺チームのリーダーとして、『誇り』にして死んでいくべきだ・・・あの世でおまえの部下達も納得することだろう」

そう言うってから、ボスは自分の身体から奪った「鉄分」を戻せば潔くとどめを刺してやろうとリゾットに取引を持ちかけた。

もうすぐここにギアツチョ達を殺した連中がやってくる。そいつらの前で次第に惨めに死んでいくのは屈辱的ではないか？今ならこのボスが直々に名誉ある死を与えてやろう。

そんなボスの交渉に、リゾットは聞き取れない声で何かを呟く。

「よく聞こえないぞ・・・　すぐに『鉄分』を戻すのだ・・・」

リゾット・ネエロ」

ぼそぼそと何かを呟き続けるリゾットの口に、ボスが耳を近づける。

「ひとりでは……死なねえっ……言っただ……」

その言葉に、ボスはバツとリゾットの顔に眼を向け、そして彼の決死の『覚悟』を秘めた赤眼にようやく気付いた。

「今度はオレが……利用する番だ 『エアロスミス』を……くらえ……!!」

リゾットがそう言うと同時に、ボスの後ろから無数の弾丸が発射された。

ホルマジオの命を奪ったスタンド——エアロスミスだった。

しかし、一瞬の後に全身から鮮血を吹き出したのは、ボスではなくリゾットだった。

最期の一瞬、彼は何を考えていたのだろう。真っ赤に充血したその眼からは、もはやいかなる感情も読み取ることとは出来ない。リゾットは被弾の衝撃にガクンと身体を震わせると、一言も発することなく息絶えた。

ここに、リゾット率いる暗殺チームは全滅した

『たら』『れば』など存在しない、だが……

だがもし・・・、もしも誰も欠ける事なくボスに辿り着ければ・・・

結果は違ったのかもしれない

薄れ逝く意識の中リゾットは小さくそう呟いた・・・

この世界では暗殺チームは真の栄光に辿り着けなかった、だが数多
と存在する可能性の世界、
平行世界ならば、彼らが真の栄光を勝ち取る未来があってもおかし
くはない

これはそんな平行世界の1つ
彼ら暗殺チームが主役となる世界

ボルポの遺産を狙え！1・

そこは小さな一室、彼ら暗殺チームの拠点であった、部屋の奥でパソコンのキーボードを叩くメローネ、その手前のソファで鬼の形相でテレビを殴るギアッチョ、見かねたプロシユートとホルマジオが止めに入るのも既に日常となっっている

「ギアッチョ！オメーは馬鹿か！？物を壊すなど何度言ったらわかるんだ！」

今にもギアッチョの胸ぐらを掴み掛かりそうなプロシユート

「しょうがねえなああああつ、これでお前が壊したテレビ何台目なんだよギアッチョさんよおおお」

そして比較的冷静に『キレ』ているのがホルマジオ、だが当のギアッチョは二人の説教もどこ吹く風で聞き流している、と言うより全く聴いていない

「おいおい、その辺にしとけよ、どうせギアッチョには何を言っても無駄だからよオ」

止めに入っただのはイルーゾオである、

「どうせリゾットから怒られるのはギアッチョだ、それに俺なんかはパソコンを壊された事もあるんだぜ？」

いままでパソコンに釘付けだったメローネも呆れた様子で止めに入る

「オメー等は黙ってる！今日という今日は許さねーぜギアッチョ！」

「しょうがねえなああああ、仲間に対する敬意が足りないんじゃないかねえのか？ギアッチョさんよおおお」

しかし二人の怒りはそんな物では収まる事は無かった、
ペッシ？とばかりを受けない様に部屋の隅で隠れてますよ

コンッ コンッ コンッ

不意に扉が一定の間隔で三回叩かれた、

この音は彼ら暗殺チームの合言葉代わりであり、もし合図無しで扉を開けた物ならば問答無用でスタンド攻撃を受けるだろう・・・

「リゾットか、俺が出よう」

そう言い席を立ったのはイルーゾオだ、扉を開けた先にはイルーゾオの予想通りの人物、

暗殺チームのリーダーであるリゾットであった

「今帰った・・・、早速だがお前達に朗報がある」

暗殺チームの面子は何時も冷静なリゾットが若干落ち着きが無い事に疑問を抱いたがそれは直ぐに興奮へと代わる事となる

「つい先日幹部であるポルポが・・・、自殺した、そして組織のなかでそのポルポに隠し財産があると言う噂が流れている」

ポルポの自殺、しかし一流の暗殺者であるリゾットは自殺と見ておらず何らかの手段により始末されたと考えていた、しかしそんな事はどうでもいい事だ、重要なのは『誰の物でもない、フリーな金が存在する』と言う事なのだ

「おいおい、それはマジな話なのかリゾット？」
無論リゾットが信憑性の無い噂話しに踊らされる訳は無い、つまりは何らかの確証をもって自分達に話したのだろう

「ああ、そしてその額は・・・、最低でも四億はあると言う話しだ」

小さな部屋に歓声が沸く、
それはそうだろう、彼ら暗殺チームは正当な報酬さえ貰えないのだ、日々生きて行くだけでも苦しい生活を送ってきているのである、そんな中でのチャンスだ、喜ばない訳は無い

「リゾット！その隠し財産の場所はわかっているのか？」

誰よりも早く冷静さを取り戻したプロシユートがリゾットに待ったをかけた

「勿論それも既に調べてある、しかしポルポの腹心だったブチャラティのチームも確実に隠し財産の場所を知っているだろう、つまり直ぐにでも行動を起こさなければならぬ！」

「しかし全員で固まって行く訳にはいかん、つまりはチームを二つに別ける必要がある」

リゾットの言葉をペッシ以外の面子は当たり前だと言う様に聴いている

「あ、兄貴イ、そんな面倒な事しないで全員で行っちゃダメなんですかい？」

ペッシの疑問はプロシユートが答える前にリゾットが説明する

「もしも、固まって行動してなにかしらの攻撃を受けた場合一網打尽にされる可能性がある、だが二つに別けておけば攻撃されてももう片方が援護できる」

「先行する者は既に決めてある、先行部隊はホルマジオ、プロシユート、ペッシ、イルーゾオの四人だ」

リゾットに指名されホルマジオ達はゆっくりとソファアから立ち上がる

「しょうがねえなああああ、任された以上はしっかりと働かせてもらっぜ」

「ギアッチョとメローネは俺と共に後からホルマジオ達に着いて行動する、移動手段は用意してある、絶対にしくじる事はできない、全員心して掛かれ！」

リゾット率いる暗殺チームは今、史実と異なる運命を歩み始めた、各々が『栄光』を掴む為に・・・

ポルポの遺産を狙え！2・（前書き）

初っぱなからリアルが忙しくなって約半年間放り投げ状態になってしまいました。がようやく復帰しました！ 今後は最低でも月一ペースでも更新していきたいと思しますので、どうぞよろしく願います！

ポルポの遺産を狙え！2・

リゾットが暗殺チームの拠点に到着したのとほぼ同時刻、
ここにもポルポの遺産を狙う者は居た、しかし史実と違う所は彼らは本来ブチャティチームを追跡する筈だったのだが・・・

ブローオーーーーーーッ！

「今さっき聞いた情報なんだがよオ、幹部連中が騒いでる・・・、
『ポルポ』が『自殺』したってな！」

道路を暴走する車の中で不意に男が口を開いた、

「あ？」

それに気の抜けた返事を返した車を運転している男は全く前を見ていない、
にも関わらず器用に前方の『障害物』を回避していく

「おい、前見てろよぉ？」

最初に口を開いた男は相方の危険運転には慣れているのか平然としている

「平気だ」

しかし運転している男はそんな相方の注意に聞く耳を持たない

「『自殺』？あのデブがか？」

赤信号でも構わず男はアクセルを踏み、そして衝突しそうになった車を見事に回避する

「前見ろつたらよオーーッ！」

今のは流石に肝を冷やしたのか助手席に座っている男が声を荒げる、

「ポルポの奴、デブを気に病んでなのか牢獄でメランコリックな気分になったのか、とにかく結構チヨロイ神経だったみてーでよオー！」

「自分の拳銃を口にくわえてドバツとやったんだってよ！」

相方に怒鳴られても尚前を見ないこの男もここまで来れば見事である、彼が運転する車はおそらく組織で『助手席に座りたくない車N0・1』アンケートでも上位に入るだろう、

ちなみに三位にギアツチヨの名前が載っている、『キレると運転中にハンドルを引っこ抜く』という所がかなりのマイナス点だったのだろう、しかしこの話しは本編とは関係が無い為これ以上は割愛する

「マジに『自殺』なのか？バラされたんじゃないやなくて？」

「マジに『自殺』だ・・・、検死つてやつか・・・、『専門家』が見ると自殺か他殺の区別は直ぐにつくんだとよ」

「それよりだな・・・、ポルポの『財産』の噂・・・、知ってるか？」

助手席の男の声のトーンが僅かに下がる

「噂？宇宙のハテを知らねーようにそんな噂知らねー」

それに気付かずか運転している男はどうでもよさげに返事を返す

「ポルポは牢獄に入る前、自分の財産を少しばかり宝石とか金塊に変えてどっかに隠したって噂なんだ！」

そんな相方とは対照的に助手席の男の口調に熱が入る、助手席の男の様子は最早ただの噂話しをする物ではない

「『隠し財産』さ！」

そう、『それ』の存在を確信しあわよくば『それ』を横取りしてやろうと企んでいる、まさにギャングその物だ

「……、ブチャラティーなら金塊のありかを知ってるんだろうが……、アイツはポルポの後を引き継いで幹部になった所だから暫くは動けねーだろうな」

助手席の男の脳裏に浮き上がるのはポルポの懐刀にして自分達同様スタンドと呼ばれる力を持つ者達を集めて構成された部隊のリーダーを務める人物ブチャラティーともうひとり……

「後は……、例の暗殺チームの連中ならもう嗅ぎ付けてるかも知れねーな、そこらのチンピラ共は舐めてかかってやがるが実際アイツ等はたいした物だぜ」

そしてそのもうひとり、それは暗殺チームのリーダーリゾットである、無論ボスですら全容を掴めなかったリゾットだ、助手席の男は

リゾットについては名前程度しか知らないが暗殺チームもまた全員がスタンド使い、そして組織の内外を問わず邪魔者を迅速に、そして確実に始末し組織の急成長に大きく貢献している点を見ればバカにできない実力者揃いだと容易に想像できる

そして今史実がズレた、僅かに、だが決定的に……

「隠し財産がマジに存在するってえなら！オレの予想通りなら暗殺チームの奴等は動くはずなんだ……。いや、絶対に動く！フリーになった金を回収しにな……！奴等は絶対に……。ハッ！」

そしてヒートアップしていた助手席の男は我に返った、いつの間にか運転していたはずの男が消えているのだ、しかも車は相変わらず爆走している

「……！」

次の瞬間思い出したかの様に車はコントロールを失う

「おいッ！ズツケエロ！」

間一髪、大惨事になるまえに助手席の男がバンドルを取り事なきをえる

「行っちゃったよズツケエロのやつめ……っ、だが暗殺チームを尾行するなら気をつけろよ……」

ズッケエロの能力を疑う訳ではない、だがズッケエロは尾行や暗殺に向けた能力というだけであり今回の相手は本職の連中だ、最悪ズッケエロから自分の情報まで漏れるかもしれない

そして助手席の男は何かを思い出したかの様に車を停めた後、携帯電話を取り出しズッケエロと呼ばれた男とは別の誰かと連絡を取る

こうして史実とはズレた物語りは進んでいく・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1731v/>

ジョジョの奇妙な冒険～逆襲する暗殺者達～

2012年1月9日23時49分発行